

老人のロールシャッハ反応に関する一研究

——老人ホーム収容者について——

碓 井 公 明

はじめに

これまでになされた膨大な量のロールシャッハ研究の中では、老人に関する研究は比較的未開拓な領域である。これは、ひとりロールシャッハ研究についてのみいえることではなく、人格研究すべてにおいて、老人研究は取残された領域である。この原因として、組織的な被験者獲得の困難性、研究方法の制約が考えられるけれども、研究方法の面では、Ames, L. B.(1954)の指摘する通り、ロールシャッハ法は質問紙法などに比して、老人研究において、より有利な武器であると考えられる。

老人研究に際して問題となることは「老人」を如何なるものとするかということである。一般的には、60才以上の者を「老人」とみるようであるが、単に年令の上から老人を区分することには疑問が残る。生活経験の乏しい幼児、児童と異り、人生の終末近くなって、それまでの生活歴から生じた個人差が積み重なっている年代においては、年令差はあまり重要な意味をもたないと考えなければならないだろう。

50才で、すでに精神の老化現象がかなり進んでいる者もいるし、80才になっても壮年期の精神を保ち続けている者もいることは、世間一般によく認められるところである。

我々がロールシャッハ法でつかみたいものは、年令の多い者の人格というよりも、老化現象のロールシャッハ法への反映であろう。

その意味において、我々は確実に老化現象が起っていると認められる集団に検査に実施する必要がある。これは、現実の問題としては、多くの難点を含んでいるが、我々としては、すくなくとも、そのような被験者群を選ぶための努力をしなければならない。

我が国では、老人のロールシャッハ反応についての研究で本格的なものは、まだ公表されていないようであるが、外国では、被験者数、分析の深さにおいて、他の追従を許さないようなAmes, L. B. et. al. (1954)の研究がある。この研究では、老人をロールシャッハテストの結果にもとずいて、Normal, Presenile, Senile に区分して検討を加えている。この場合、分類の基準をロールシャッハテスト結果にとり、その基準にしたがって区分された三群のスコアを比較するという循環論的な方法をとった点に問題が残るけれども、老人を区分して、正常成人に近い者と

老化現象の起っている者を区別して考えようとしたことは意義深い。

老人のロールシャッハ研究のほとんどは、老人集団として、在宅者と施設収容者を区別せずに集計しているが、老化現象と年令を一義的に結びつけ得ない現状では、このような方法は、いたずらに資料のばらつきを大きくするだけで、積極的な意味は認められない。

本研究では、老化現象の起っている集団として、公立の老人ホーム収容者のみを選んだ。彼等は、一般社会への適応力をかなり失っており、特に経済的な自立の能力をほとんど失っているという点で、狭義の「老人」、すなわち、老化現象が起っている老人であると考えることができる。もちろん、彼等には、施設収容者特有の心理があるだろうし、公立の老人ホームには社会的経済的地位の比較的低かった、知能の比較的低い者が集まっていることは、ほぼ確実であるから、彼等について得た資料から、老化現象一般を論ずることは無理であろうけれども、老化現象の起っている者の一部と考えることは妥当であろう。

しかし、本研究は被験者数が少ないので、この結果から、施設収容老人全体を論ずることも危険であるが、諸家の研究結果と比較検討することによって結論の信頼度を高めたいと思う。

方 法

被験者 昭和37年8月および38年8月に、松江市内の公立老人ホーム二ヶ所の収容者を対象としてテストを実施した。収容者の1/3は病氣、言語障害、難聴などのため検査不能であった。又テストを実施しても、テストの意味が全然理解できない者、半数以上のカードに反応を与え得なかった者は、本テストが完全には実施できなかったものとして、被験者群から除外した。これは、身体的、精神的にいちじるしい老化現象の起っている者には、老人研究に有利な本テストすら施行不能であるという、テスト使用の限界を示していると考えなければならない。

結局、実質的に本研究の被験者とされたものは、TABLE 1 に示す通り、57才から 91才までの男子30名、女子16名、計46名であり、平均年令は71才であった。

実施方法 ロールシャッハテスト実施に際しては、対象が老人であり、一括質疑には無理があるように感じられたので、カードごとに質疑を行なったこと以外は、一般的な手続をとった。

整 理 資料の整理は、片口法 (1961) によったが、F+ %はF+及びF±を含めたものであり、他の決定因については、形態評価をおこなわなかった。

各反応カテゴリーについて、平均値、範囲を算出し、標準偏差の意味があるカテゴリーについては、これも算出した。

TABLE 1 Subjects

Age	Male	Female	Total
57—59	2	3	5
60—69	10	4	14
70—79	15	7	22
80—89	2	2	4
91	1	0	1
Total	30	16	46
Mean	71.1	70.1	71.0

結果および考察

先に述べた手続きによって得た結果を TABLE 2 に示す。この結果を他の老人ロールシャッハ

の資料と比較することによって、この結果の位置づけを行ない、日本人の基準（成人）および児童の資料と比較することによって、老人の特徴について考察する。

TABLE 2 Means, ranges and SD of each Rorschach scores
No. of Subjects ; 46(M=30, F=16)

Category	Mean	Ranges	(SD)	Category	Mean	Ranges	(SD)
R	14.3	7-32	(5.13)	H	3.1	0-10	(2.28)
Rej.	1.0	0- 4		H%	22.8%	0-71%	(16.24)
W	6.0	1-12	(2.58)	A	8.0	3-17.5	(13.85)
DW	0.0	0- 1		A%	54.5%	18-100%	(18.18)
D	7.4	0-19	(6.04)	A obj.	0.3	0- 2	
Dd	0.9	0-12		At	0.2	0- 2	
S	0.3	0-3.5		Ob	0.8	0- 4	
				Pl	1.2	0- 7	
W%	43.9%	9-85%	(19.96)	Sex	0.0		
D%	48.8%	10-92%	(19.01)	Blood	0.0		
Dd%	5.5%	0-45%		Fire	0.1	0- 1.5	
M	1.8	0-10		Cloud	0.0	0- 0.5	
FM	1.2	0- 5		Smoke	0.0		
m	0.1	0- 1		Food	0.1	0- 2	
k	0.0			Geo	0.0	0- 1	
K	0.1	0- 1.5		Abst	0.1	0- 3	
FK	0.0	0- 1		Lds	0.0		
Fc	0.3	0- 2		Na	0.5	0- 5	
c	0.1	0- 1		Arch	0.2	0- 2	
C'	0.2	0- 1.5		Expl	0.1	0- 1	
FC	0.6	0- 4		Art	0.0	0- 1	
CF	0.4	0- 3		P	3.9	0-10	(1.89)
C	0.0						
sp.C	0.0	0- 1		Rej.			
F	10.1	4-21	(3.87)	I ;	1		
F+	0.0			III ;	4		
F±	5.8	2-13	(2.58)	IV ;	10		
F干	3.3	0-11	(2.33)	VI ;	8		
F-	0.8	0- 8		VII ;	10		
F%	69.3%	29-100%	(14.60)	IX ;	7		
F+%	61.2%	24-100%	(20.50)	X ;	6		

諸家の研究との比較 Ames (1954, p. 5—13) の引用している外国の資料および伊藤の研究 (1959) と本研究の結果を比較した。TABLE 3 は比較の一覧表である。

本研究の反応数 (R) は14.3で、Klopfer, Dorken および Ames の Presenile, Senile とほぼ同じ値を示し、伊藤よりは低い値を得た。これは、本研究の被験者が狭義の「老人」であると考えられる一根据を与えている。

TABLE 3 Comparative Findings of different Investigators

	Klopfer	Prados & Fried				Dorken & Kral Chesrow et. al.				Ames et. al.				Ito	This study
		Normal old age				Senile dementia				Normal Presenile Senile					
		50-60	61-70	71-80	76.3	72	70-100	60-	71.0						
Age (mean or range)	73.5	50-60	61-70	71-80	76.3	72	70-100	60-	71.0						
Number of subjects	50	13	12	10	30	20	41	140	19	156	46				
R	14.1	20	23	20	15.1	18	25.9	15.7	13.5	16.5	14.3				
Rej.							0.2	0.6	1.4	0.7	1.0				
W%	high	61%	52%	43%	31%		36%	43%	46%	37.1%	43.9%				
D%	low	37%	46%	55%	50%		47%	47%	45%	57.4%	48.8%				
Dd%		2%	2%	2%	17%		15%	9%	8%	3.2%	5.5%				
F%					55%		50%	64%	92%	65.4%	69.3%				
F + %						70%	93%	81%	50%		61.2%				
M	1.4	2.6	1.9	1.8			3.3	1.6	0.2		1.8				
FM	3.2	4.8	5.0	5.1			2.7	2.0	0.3		1.2				
m	0.1						0.7	0.3	0.0		0.1				
FC	0.3	1.8	1.7	0.2			1.0	0.3	0.0		0.6				
CF	0.7	1.5	1.6	0.2			1.3	0.5	0.2		0.4				
C	...	0.2	0.2	0.3			0.2	0.1	0.1		0.0				
P							7.1	5.4	2.1	6.5	3.9				
A%	high	43%	45%	49%	47%	49%	46%	55%	40%		54.5%				
H%							24%	17%	5%		22.8%				

不答数 (Rej) も1.0で, Ames の Senile より少なく, Presenile および伊藤よりは多い。これも, 反応数についてと同様に, 老化の反映であると考えられる。

全体反応パーセント (W%), 部分反応パーセント (D%) は, 諸研究の中位の値 (43.9%, 48.8%) を得ている。

異常部分反応パーセント (Dd %) は, 研究者間の差異がかなり大きい, やはり中位の値 (5.5%) であり, 伊藤と比較すると, やや高い。

形態反応パーセント (F%) は69.3%で Ames の Senile より低く, 他の結果よりやや高い。

良形態反応パーセント (F+%) は61.2%で, Ames の Senile よりは高いが, 他の結果よりはいくぶん低い値を示している。

人間運動反応 (M) は1.8であり, Prados の50才—60才, Ames の Normal より少なく, Ames の Senile を除く他の結果とはほぼ一致している。

動物運動反応 (FM) は1.2で, Ames の Senile よりは多く, 他のどれよりも少ない。

無生物運動反応 (m) については, 出現頻数が少なく, 平均値の信頼度が落ちるカテゴリーであることを考え合わせると, 他の研究結果とほとんど差異が無いと考えてよからう。

形態色彩反応 (FC) は0.6で, Prados の50—70才および Ames の Normal よりは少なく, 他よりは多い結果を得た。

色彩形態反応 (CF) は, 0.4で, 他の研究のほぼ中位の値であった。

純色彩反応 (C) は, 0.0で外国の資料よりも少ない, この点, 民族的差異の問題にも関連しているのかもしれない。

平凡反応 (P) は, Ames の Senile よりは多く, Normal, Presenile よりは少い。伊藤の結果は6.5であり, 本研究の3.9とはかなりひらきがある。

動物反応パーセント (A%) は54.5%で, Ames の Presenile と一致し, 他のどれよりも, わずかに高い傾向が認められた。

人間反応パーセント (H%) は22.8%で, Ames の Normal と Presenile の中間に位置づけられる。

以上, 比較結果を羅列したけれども, 伊藤の資料がカテゴリー全般にわたらないこと, 他の比較対象が外国の資料であることが本研究結果の位置づけを正確に行なうことを困難にしている。しかし, 一般的にみて, 本研究の被験集団は, 伊藤のものよりも老化現象の進んでいる集団であり, Ames の基準によると, Presenile と Senile の中間に位置づけることができよう。

このことは, 狭義の「老人」集団として, 老人ホーム居住者を選んだことがかなり適切であったことを示している。

これで, 本研究の資料を正常成人および児童の資料と比較して, 老人の特徴を明らかにしようとする試みの正当性が保証されたものとして, 論を進める。

日本人の基準 (成人) および児童との比較 日本人の基準として, 児玉の資料 (1962) を使用した。さらに, この資料の一般性をみる意味で, 片口の資料 (1961 p. 158—213) も補った。又

児童の資料としては、辻、浜中の資料(1962)を使用した。これらと本研究の資料を比較することによって、老人のロールシャッハ反応の特徴について考察したいと思う。

比較の一覧表は TABLE 4 に示すが、老人は成人と比して、反応数(R)が少なく、全体反応パーセント(W%)がやや高く、動物運動反応(FM)が少なく、形態色彩反応(FC)、色彩形態反応(CF)が少なく、純色彩反応(C)もやや少ない傾向がある。陰影反応も全般的に少ない。反応内容では、人間反応パーセント(H+Hd%)、動物反応パーセント(A+Ad%)共に高くなっている。平凡反応(F)はやや少ない。

児童と比較すると、反応数はやはり少なく、全体反応パーセントは高く、人間運動反応も高い。色彩反応は全体に老人が少ない。人間反応は児童が少ないので、人間反応パーセントも反応数の差を考えると、児童の方がずっと低くなるはずである。動物反応パーセントは、

両群同程度で、成人より高い。

以上の比較結果を要約する

と、次のようになる。

1. 反応数、色彩反応において、老人は、成人、児童より少ない。

2. 全体反応パーセント、人間反応パーセントは、両群より老人の方が高い。

3. 動物反応パーセントは、老人、児童共に成人より高い。

4. 動物運動反応、陰影反応、平凡反応は、成人より老人が少ない。

5. 人間運動反応は、児童より老人の方が多い。

これらが老人のロールシャッハ反応の特徴であるが、結局、反応数の減少が最大の特徴であると云えよう。そして、反応数の減少は形態反応以外の決定因における減少、

TABLE 4 Comparison with normal Japanese and elementary school child

Category	Normal Japanese	Child	This study
R	20-32	26.5(M) 24.1(F)	14.3
W	8-13→	4.5	6.0
W%	30-50% (39.0%)	22.51%	43.9%
D	8-13→	12.6	7.4
D%	50-65% (50.8%)	50.84%	48.8%
F%	←79-90% (43.8%)	68.06%	69.3%
F+%	60-75%	61.25%(M) 61.73%(F)	61.2%
M	1.7(3.6)	0.35-1.38	1.8
FM	1.7(3.4)	0.59-1.45	1.2
m	0.1(0.7)	0.16-0.31	0.1
FC	1.2-2.0(2.7)	1.38-1.87	0.6
CF	←1.0→(1.2)	0.79-1.13	0.4
C	←0.7→(0.1)	0.03-0.35	0.0
C'	1.0		0.2
Fc	0.7		0.3
FK	0.3		0.0
K	0.1		0.1
k	0.1		0.0
H+Hd	3.5-5.0	1.32-2.71	3.1
H+Hd%	13%		22.8%
A+Ad	7-11	17.4	8.0
A+Ad%	38%	55.52%	54.5%
P	4.6		3.9

※ Normal Japaneseの資料は児玉、()内は片口
Child の資料は辻等

反応内容では、人間および動物以外の反応の減少をもたらしたと考えられる。

反応数の減少は、テスト場面の観察結果と考え合わせると、次のように解釈できよう。

老人においては、不明瞭な図形に対する意味づけの能力が劣る、すなわち、精神活動が[＊]かたいため、プロットを単なるインクプロット以外のものとみることに抵抗を感じ、又思考の転換、すなわち、カードⅠを「こうもり」と見ると、それに影響されて、他の反応を考えることが困難であると解釈できる。

結局、精神活動の[＊]かたさ、および思考の流動性の欠除が、老人特徴の主要な部分を占めると考えることができよう。

反応数の減少と関連して、全体反応パーセントの増加についても考えなければならない。

全体反応パーセントが増加したということは、反応数減少の結果であると考えられるが、老人において、全体反応が支配的であるということは、彼等が生活場面において、分析的なものの見方よりも、全体的、総合的な見方が強いと考えてよからう。彼等は種々の事態を分析し、その結果を論理的に積み重ねて、判断を下すよりも、事態の全体的な感じ、全体の印象に基づいて、判断を下し、行動する場合が多いであろう。

次の特徴として、色彩反応、陰影反応の減少があげられる。これは彼等において、情緒的表現力、感受性が欠除し、不安感もほとんど存在しないことをあらわしている。人間運動反応については、児童と老人の間に差があり、老人は成人に近似している。これは、行動の安定性、統制力は、老化と共に減少しないことを示している。動物運動反応にみられる衝動性は、成人に比して老人では減少しており、この面では、老人の方が安定していると考えられる。

人間反応は、実数においては成人とほぼ一致しているが、率では、かなりの増加が認められる。これは、老人が成人に比して、共感性においては劣っていないが、興味の多様性、思考の流動性において能力の低下が起っていると考えられる。動物反応パーセントも、実数においては成人と同じであるのに、増加している。これもやはり、思考力、想像力の働く範囲が狭くなり、ステレオタイプになっていることのあらわれであると考えることができる。児童との比較では、実数において児童が多く、率では同程度になっているが、これは反応の生産性の問題であって、上述の老人特徴は、そのまま児童の特徴でもあると云えよう。老人における平凡反応の減少傾向は、社会的協調性の低下をあらわしているともみることができるけれども、反応の生産性と考え合せると、特に問題にすべきでないかもしれない。

このようにみてくると、ロールシャッハ反応にあらわれる老人像は、生活場面を全体的印象に基づいて判断し、自己の反応形式を、安易に、すべての事態にあてはめるようなやり方で処理する人であり、情緒的には枯淡の境に達し、よろこびや悲しみをあまり感じないで、不安感を持たず、現実吟味の能力はおとろえを加えてはいるが、他人の気持を理解し受け入れる態度を持ちつけながら、淡々と生活している、ある意味では安定した、活気はないけれども落ち着いた人ということになる。これが本来の意味での「老人」と云うことができよう。

本研究の結果は、集団は小さかったけれども、内外の老人ロールシャッハ反応の研究結果と大

差なく、狭義の老人に近い者をとらえ得たと考えられる。又得た老人像も常識的に考えられるものとほぼ一致しているので、老人研究にロールシャッハ法を導入することは適切であると考えられる。

しかし、本研究で行なった比較は、個々のカテゴリーであり、又単なる集団平均の比較であった点、問題が残る。さらにカテゴリー間の関係、比率について検討すると共に、個々の老人のプロトコルから得られる人格像への老化現象の反映を検討する必要がある。

要 約

老人のロールシャッハ反応の特徴を明らかにし、老化現象のロールシャッハ反応への反映をみるために、46名（男子30名、女子16名）の57才から91才までの老人ホーム収容者（平均年齢71才）にテストを実施した。この結果を内外の老人ロールシャッハの資料と比較したところ、本研究の結果は、老化現象の起っている老人の資料であると考えることができた。

そこで、この結果を日本人の基準（成人）および児童の資料と比較し、老人の特徴について検討した。

その結果、老人の主な特徴として、精神活動の「かたさ」、思考の流動性の欠除（Rの減少、A+Ad%の増加）、全体的な印象に基づく判断、行動（W%の増加）、情緒性の減退（色彩反応、陰影反応の減少）が明らかになった。

（S.38.10.31.受理）

文 献

Ames, L. B. et. al. (1954) Rorschach Responses in Old Age.

伊藤正昭, 杉村史郎 (1961) 老人に施行せるロールシャッハ・テストに関する研究Ⅰ, ロールシャッハ研究Ⅱ, 30—38

片口安史 (1961) ロールシャッハテスト・心理診断法詳説, (牧書店)

児玉省 (1962) 日本女子大式・日本人のロールシャッハ反応の基準, ロールシャッハテスト1, 223—270 (中山書店)

辻悟, 浜中薫香 (1962) 児童の反応, ロールシャッハテスト1, 272—326 (中山書店)